広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第52号　2003　87－95

壬戌学制時期における中等体育教員養成の展開

― 東南大学と北京師範大学を中心として ―

尚　大鵬

(2003年9月30日受理)

About the training of the secondary physical teachers expanding on Ren-Mao School System Time: Focusing on East-South University and Beijing Normal University

Dapeng Shang

1922, under the effect of the United States education, there had been a reformation of the school system in China. As a result, a school system called Ren-Mao School System had been established and senior normal schools had been developed to universities. These reformations also made a development of the training of physical teachers for middle school, especially the appearance of a non-normal university and a normal university. Although the model formed in the non-normal university had disappeared, the people who supported this model had become more and more in the Chinese educational reformation recently. In order to analyse the possibility of this model for people who majored education, it is necessary to recall and analyse the history that happened in China. So this article will analyse the training of the physical teachers for middle school, and it is from the beginning of this history, and takes East-South University and Beijing Normal University for examples.

Key words: Ren-Mao School System,training of secondary physical teachers,East-South University, Beijing Normal University

キーワード：壬戌学制，中等体育教員養成，東南大学，北京師範大学

はじめに

現在，中国の中等体育教員養成系は，師範大学の体育系と体育大学（学院）により構成されている。師範系における中等体育教員の養成は，1916年南京高等師範学校体育専修科が開設されてから始まり，今日まで既に80年以上が経過した。師範教育機関の体育教員養成は，師範教育史の制約を受けながら変遷してきたことは言うまでもない。しかし，21世紀に入った今日，従来通り教員養成機関を独立に設置すべきか否かという論争により，体育教員養成の行方も明らかでないのが現実である。このような時に，これまで本格的な研究のない中等体育教員養成史を検討することは意義あるものと思われる。

本研究で取り上げる壬戌学制とは，1922年，アメリカ影響のもとに制定され，六三三制や男女共学など当時の中国教育を大きく変えようとするものであった。また，この時期はこれまでよりも修業年限を上げ，本科4年制の師範大学体育系における教員養成が開始され，一般大学でも中等体育教員養成が行われた時期である。その後も，大学本科における中等教員養成が継続されていくが，一般大学における教員養成は日中戦争下で姿を消し継続することがなかった。

本論文では，一般大学である東南大学（後の国立中央大学）と北京師範大学両大学の体育系と専修科を中

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：佐藤尚子（主任指導教官），坂越正樹，楠戸一彦，大林正昭

心として，両校の制度，カリキュラム，教員陣容，卒業生の状況などを分析する。それにより壬戌学制時期における中等体育教員養成がそれ以前と異なり大学教育として展開したことを明らかにする。

壬戌学制時期の体育教員養成に関する研究としては，何啓君，胡暁風の研究が挙げられる。しかし，彼らの研究は本研究の主題について詳細な論述をしているものではない。特に，彼らは両校における体育専修科と本科体育系の相違に気がついていないため，新学制の公布と高等師範学校の改革が体育教員養成に与えた影響について何の言及もしていない[1]。

Ⅰ．壬戌学制以前の中等体育教員養成

1．優級師範学堂附設体操専修科

中国の体育教員養成は，清末における近代教育の開始に伴った体育教員養成機関の設置に始まる。1906年4月，中央教育行政機関である学部より「各省に師範定員を拡大するよう通達する」が出された[2]。これは体操科教員養成について，修業年限5ヶ月の体操専修科を各師範学堂に附設し，各校定員100名とし，教育課程として教育，遊戯，体操，生理，教授法などを設置せよ，というものであった。その後，中等教員養成を目指す成都優級師範学堂，浙江両級師範学堂，江西優級師範学堂，山東優級師範学堂[3]などに相次いで体操専修科が設けられた。北京にも京師優級師範学堂があったが，直隷省には直隷音楽体操伝習所が設置されたため[4]，京師優級師範学堂は体操専修科を設置しなかったと考えられる。

しかし，清末のこれらの優級師範学堂体操専修科は，初等体育教員養成を目的とし，短期的速成的なもので，中華民国成立後，一期あるいは二期の卒業生を送っただけで廃止された。

2．高等師範学校附設体育専修科

1912年，民国最初の学制である壬子学制が公布された。同年に「高等師範学校規程」も公布された。この規程の第8条は，「高等師範学校は専修科を設けることができる（師範学校及び中学校の某科目教員の不足時に設置する）」と定めていた[5]。それに基づいて，1916年に南京高等師範学校は体育専修科を最初に開設した[6]。それに続いて翌年の1917年には北京高等師範学校に体育専修科が開設され[7]，1918年には広東高等師範体育専修科が開始され，そして1921年には成都高等師範学校に3年制の音楽体育専修科が設けられた。体育専修科の修業年限は，南京高等師範学校においては1916年第1期生2年制，1919年第2期生3年制であった。北京高等師範学校は第1期生2年半，第2期生3年制を置いている。

地理などの科目が本科であったのに対して，これらの体育専修科は本科ではなく，且つ師範学校と中学校の体育教員が欠ける時に臨時的に設置する機関であったと見られる。体育専修科の設置が制度上において常設されるようになったのは，1919年4月に教育部により出された「各高等師範学校に教育会連合会より呈された体育施設に関する文に従い弁理することを通令す」によってである[8]。この文では，「各省の需要に応じるため，凡ての国立高等師範学校で体育専修科を設置する」と述べている。これは高等師範学校体育専修科の常設を明確化したものである。

1920年，全国教育会連合会第6回大会が開催された。この大会では，「国立体育学校の設置を申請する案」[9]が議決され，教育部に上申された。この案では5つの点から国立体育学校を設置する意義を述べている。これに受け，教育部から「高等師範学校への令」（訓令第208号1921年7月16日）が出された[10]。その内容は以下の通りであった。

> 第6回全国教育会連合会により上呈された体育学校を設立する議決案の審査については，体育の統一及び体育完全人材を養成するため，確かに実行の必要がある。ただし，現在の国庫は非常に乏しいため，設置が容易でない。本部（教育部）は国立高等師範学校体育専修科の修業年限を増加しレベルを向上させ，本科に改めるようにする。また経費がやや充足すれば専校（体育専科学校）の創設を行う。

この訓令から，国立体育学校の設置に関する全国教育会連合会の提案は教育部から認可されなかったが，そのかわりに高等師範学校の体育専修科を本科へ昇格させるという指示が出されたことが明らかになる。しかし，この指示が出された翌1922年に壬戌学制が公布され，体育専修科の昇格は新学制の公布および高等師範学校の改革に伴い新たな性格を持つようになった。

Ⅱ．一般大学本科の体育教員養成

1921年頃，教育関係者の間で注目されたのは中等教育に対する改革であった。同時に高等師範学校のレベルを向上しなければならないという見解が一致して見られるようになった。しかし，高等師範学校が師範大学に昇格するのか，あるいは一般大学に昇格するのかをめぐる意見の対立が表面化し，論争が広がった[11]。高等師範学校を廃止し一般大学に改める意見を揚げる

のは多数の高師関係者であり，高等師範体制を残し師範大学に昇格させる意見を主張するのは北京高等師範学校長李建勛と教員学生らであった[12]。この結果，壬戌学制時期では北京高等師範学校から昇格した北京師範大学以外には，独立した高等師範教育機関はなくなった。南京高等師範学校が東南大学に，武昌高等師範学校が武昌大学に，瀋陽高等師範学校が東北大学に改められた。また，広東高等師範学校は広東大学に，成都高等師範学校は四川大学に合併された[13]。このような高等師範教育の変化の中で，中等体育教員養成がいかに変わったのか，これを解明するため，先ず一般大学である東南大学教育科体育系の教員養成を取り上げる。

1．東南大学の教育目的

1921年，東南大学が発足した。その大綱第1－8条の内容は以下の通りである[14]。

第1条　本大学は国立東南大学という。

第2条　本大学文科・理科・教育科・農科・工科は南京に設け，商科は上海に設ける。

第3条　本大学はレベルの高い学術の研究者と専門人材と社会事業の指導者の養成を目的とする。

第4条　本大学は以下の系を設ける。
国文系・英語系・西洋文学系・哲学系・歴史系・地学系・政治経済系・数学系・物理系・化学系・心理系・教育系・体育系・生物系・農芸系・園芸系・病虫系・農薬化学系・電機工程系・土木工程系・普通商業系・会計系・工商管理系・銀行理財系・国際貿易系・交通運輸系・保険系

第5条　本大学では予科本科及び大学院を設ける。

第6条　本大学では専修科・附属中学・附属小学校・暑期学校を附設し，並びに各教育推広事業機関を設ける。

第7条　本大学本科課程では単位制を採用し，毎週授業と自修とを合わせて3時間を半年で1単位とする。半年ごとに16単位を修得させる。特別の場合は12単位まで減らし，あるいは20単位までに増やすことができる。128単位を充足すれば卒業できる。但し必修科の体育を別に加える。

第8条　本大学卒業生は某科目学士と称する
（以下略）

この大綱の第3，4条によれば，東南大学はレベルの高い学術の研究者と専門人材と社会事業の指導者の養成を目的として本科に体育系を設けていた。1921年の段階では教員養成を目的に明記していない。すなわち，6・3・3学制が確立される前に中等体育教員養成を担ったのはまだ体育専修科であった。しかし，壬戌学制公布後の1924年に東南大学は4年制の体育専修科を3年制に改め，これまでの目的であった中等体育教員養成を初級中学校体育教員養成に変えた。高級中学校体育教員養成を担うのは体育系であると考えられた。このことから，壬戌学制による高級中学校実現後，規定が整備されない中で体育系が高級中学校教員の養成をはじめたと思われる。教育科について，『東南大学教育科一覧』では，以下のように記されている[15]。

教育科は教育・心理・体育の三つの系により構成している。この三つの系は皆南京高等師範時代に創設されたもので，体育系は最も早い。その前身は南京高等師範体育専修科である。民国4年12月に成立し，中等以上の各種学校体育教員と地方公共体育場体育主任および体育管理員の養成を目的とした。当時，体育の人材に対する社会の急な需要のため，課程は2年であった。修業年限が短いため知識が深くならなかった。1918年から3年制の修業年限に改め，1921年に4年制に改められた。（中略）1920年9月に選科制を採用し始めた。教育・心理の二系に分け，女性も収容した。大学成立後，この二つの系は体育系と合併し教育科となった。教育人員養成と学術研究及び教育事業推広を目的とするものである。

この「教育人員養成」とは何であろうか。上述の資料から，教育科は単なる教員養成機関ではなく，教員養成を含む教育人員養成機関であると解釈できる。すなわち，教員養成の意味は高等師範学校時代より薄くなったが，教員養成をやめることはなかったのである。大学として職業教育である教員養成を主目的にあげることができなかったと考えられよう。

南京高等師範学校時代と比べ，東南大学教育科の特徴について，台湾の高光敷は次のように述べている[16]。

カリキュラムと目標において高師と教育科には，一つの違いがある。高師の教育は二つの部分に分けられている。一つは，専科訓練（教科の教育）である。例えば，国文部では，国文専科教員を養成し，英語部では英語専科教員を養成することである。もう一つは，専業訓練（教育学の教育）である。このような教育を受ける者には，教育知識および教学技能を持たせた。しかし，教育科は教育学の教育だけである。この教育を受ける者は学校教員，教育行政

人員及び教育学術研究者となる。教育科の卒業生には一つの共通点がある。即ち彼らは教育学識及び教育技能を身に付けていたが，教科において専門的な知識を持っていなかった。

東南大学の大綱からみれば，高光敷のこの論述は，実際に，教育科の教育系に当てはまる。独立設置がなくなり，中国師範教育衰落期と言われているとおりである[17]。しかし，体育系は教育系と併行し，国文や英語などと異なり独立的な組織として存在していた。東南大学の体育系は教科専門教育を行うことが可能であったのではないか。以下，東南大学本科における中等体育教員養成の実態をカリキュラムから分析してみよう。

2．東南大学教育科体育系のカリキュラム

開校後の東南大学教育科はこれまで高等師範学校時代のカリキュラムを改め，再編成した。東南大学教育科一覧によれば，そのカリキュラムは以下の通りである[18]。

すべて教育科の学生は，以下の規則によって科目を選択する。

甲　共通普通必修科目（( ) 中の数字は単位数である）
英文(12)・国文(6)・社会学大義(1)・生物学(6)・世界大勢(3)・哲学入門(2)・科学発達史(3)・体育(6)（体育系の学生は術科に替える）就職指導（無単位）　計39単位
体育系の学生は共通普通必修科目のほかに，以下の科目を学ばなければならない。
物理(3)・無機化学(3)・有機及び生理化学(3)・細菌学(3)・社会学(4)

乙　共通必修科目
教育通論(6)・教育心理学大綱(3)・教育統計(3)
計12単位

丙　選択必修科目
教育科学生のうち教育・心理を主たる系とする者は，少なくとも主系カリキュラムの中から32単位を選ぶ。体育を主系とする者は，体育系のカリキュラムの中から67単位を選ぶ。

丁　補系カリキュラム
すべて教育科の学生は少なくとも補系カリキラムの中から20単位を選ぶ。

戊　自由選択科目
以上の規定以外，すべて教育科学生は本科の指導によってその他の科目を自由に選択できる。

表１．1924年の東南大学体育系カリキュラム

学　　程	毎週教授時数	週実験実習時数	修学年限	単位
普通体育		臨時	臨時	臨時
術科		臨時	5	38
解剖学と実用肌学		6	1	6
生理学		3	1	8
細菌学		3	半	1
個人衛生	3		半	2
公共衛生と学校衛生	3		半	2
体育教学法	3		半	2
人体測量学		2	半	2
診断学		2	半	2
按摩学		2	半	2
体育医学	2		半	2
体育史及び体育哲学	4		半	2
遊戯及び運動場	3			
童子軍		3		
体育行政	3		半	2
容器画		3	半	2
体育建築及び設備	2		半	2

出典：『東南大学教育科一覧』（1924年）18-20頁から作成。

以上の内容と体育系のカリキュラム（表１）を参照すると，体育系学生は，教育学の教育内容として教育通論などを学ぶ以外に，教科の教育として術科（実技）と生理化学などの学習も要求された。すなわち，体育系の学生は，他科の国文や英語などと異なり教育学教育と教科教育ともに行われていた。しかし，体育科教学法があったが，教育実習はなく，教員養成において不足面も見られた。

3．東南大学教育科体育系の教員と卒業生

東南大学教授陣には，アメリカの大学出身者が多かった。当時校長であった郭秉文に，その典型が認められる。郭秉文（1880-1969）は江蘇省江浦県人で，1896年に上海清心書院を卒業し，1908年からアメリカへ留学した。1911年，ウースター大学を卒業し，理学士の学位を取った。その後，教育学研究を希望して郭はコロンビア大学師範学院で教育学修士を修得し，『中国教育沿革史』という論文で博士の学位を取った。帰国後，彼は1915年に南京高等師範学校教務長，1919年には南京高等師範学校長，1922年には東南大学校長となった[19]。中国における高等教育の刷新をはかるため，郭秉文は東南大学教職員の採用に際して，国内外から一流の教員，特に留米帰国学生およびアメリカ人教師を多く招聘し，その中には体育教員も含まれていた。表２から，新しい体育が米国人体育主任によってもたらされたと考えられる。しかし，表３によれば，1923年の体育系教員はほとんど南京高等師範学校出身者であり，教員養成の意識が強く残っていたことがわかる。

表2．南京高等師範・東南大学・南京中央大学歴任体育主任一覧

姓　名	籍貫	経　　歴
ﾏｯｸﾛｲ	米国	米国マリア大学修士、ハーフ大学体育専科卒業、上海全国青年会体育主任
祁屋克	米国	米国オベリン大学体育学士
ﾖｯﾋﾞﾝｽ	米国	米国スプリングフイルト大学体育学士、米国体育指導員及び体育主任12年間、青年会の欧州参戦隊体育指導員2年間を経歴した
ﾏｯｸﾛｲ	米国	同　前
呉蘊瑞	江蘇	東南大学体育系卒業、アメリカコロンビア大学師範学院教育学修士、南高師東南大助教授を経歴し、現在中央大学体育主任

出典：『体育雑誌』第一期，1929年6月，123頁より。

一方，体育系卒業生についてみると，1923年から1927年までの間に15人が卒業した。本科生の就職先は大学，専科学校，中学校，体育場及び行政機関などであった。この中学校については詳細不明である。学生の出身地は浙江と江蘇両省が多かったが，他の江西・湖北・四川・福建・安徽・湖南及び遠く雲南省から来た学生もいた。学生は卒業後はほぼ出身地に戻った。高級中学体育教員に対する需要がそれほど多くなかったこの時期は，一般大学本科で教員養成とそれ以外の教育人員養成とが併行して行われていたことがわかる。

表3．国立東南大学体育系教職員（1923年）

姓　名	性別	卒業学校	職　務
ﾏｯｸﾛｲ	男	（同表2）	主任兼教授
盧頌恩	男	米国オベリン大学体育学士	体育系教授
于振声	男	山東陸軍第47旅団	国技教員
呉蘊瑞	男	南京高師体育専修科	体育系助教授
呉邦偉	女	南京高師体育専修科	体育系助教授
金翊文	男	南京高師体育専修科	体育系助教授
呉　激	男	南京高師体育専修科	体育系助教授
胡執中	男	金陵大学	体育系書記
唐新雨	男	東京日本大学商科	体育系書記
張維健	男	南京高師体育専修科	体育系助教授
崔時如	男	北京協和大学	体育系助教授
顧毅若	女	中国女青年会体育師範	体育系助教授

出典：『東南大学教育科一覧』（1924年）から作成。

III．師範大学本科の体育教員養成

1．北京師範大学の教育目的

次に師範大学である北京師範大学の体育系教員養成を考察する。

1923年，高等師範学校から昇格した北京師範大学の最初の教育目的は，中等師範学校と中等学校の教員及び職員の養成，並びに専門学術の研究であった。修業年限は本科4年，並びに臨時的な予科2年を置いている。4年で卒業生に学士の学位を授与した。北京師範大学では教育系・国文系・英文系・史地系・数学系・物理系・化学系・生物系の8つの系が本科であり，体育と手工図画は専修科となっていた[20]。ところが，この時期の体育専修科について張志賢は，「師範大学となって体育専修科は高等師範学校の3年制から4年制に改められ，その4年間の中の前2年間が予科で，後2年間が本科であった。このような予科と本科の体制は間もなく高級中学校の出現により，予科を取り消され体育専修科は完全な4年制本科となった。」[21]と述べている。体育教員養成は専修科で行われたのか，あるいは本科で行われたのかという問題について，1924年の『教育公報』「北京師範大学組織大綱」は以下のように述べている[22]。この大綱によれば，体育教員養成は本科で実施されたことが明らかである。

第一章　名称
第1条　本校名は国立北京師範大学という。
第二章　目的
第2条　本校は師範学校教師および教育行政人員養成並びに学術研究を目的とする。
第三章　学制
第3条　本校大学本科修業年限を4年とする。（修業年限2年予科を臨時的に設置し，その課程標準を別に規定する。）
第4条　本校は研究院と専修科と推広部と暑期講習科を設け，その修業年限及び詳細方法は別に規定する。
第5条　本校の本科は教育系・心理系・国文系・英文系・歴史系・地理系・数学系・物理系・化学系・生物系・地質系・体育系である。また経費がやや充足すれば農業教育系・工業教育系・商業教育系・家事教育系などを増設し高級中学校専科の教員を養成する。（以下省略）
第6条　本校学生の課程学習は単位で計算し，毎週授業出席1時間及び自習1－2時間，半年を経れば1単位とする。もし毎週授業出席1時間，自習が1時間にならず或いは2時間以上を越えれば，単位の計算は学科の性質により別に定める。（1単位は毎週3時間の作業半年で計算する）。
第7条　本校課程は選科制を採用し学生が学習する

単位は以下の４種である。(1)公共必修科(2)主科(3)副科(4)選修科

第８条　本校本科卒業学生に学士を授与する。

第９条　本校では教育を実地的に研究するため中学と小学校と幼児園を附設する。(以下略)

この「大綱」から，北京師範大学は師範学校教師および教育行政人員養成並びに学術研究を目的とし，本科として体育系が設置されたことがわかる。当時は高級中学が普及していなかったので，第２条の目的に高級中学校教員養成が明確されていないのである。『第一次中国教育年鑑』の著者は，1930年に体育専修科を体育系に改称したと書いている[23]。しかし，本科と専修科に関しては，上で引用した民国中央教育行政機関である教育部による組織大綱が正しいと考えられる。このように，当時は本科と専修科の相違もよく知られていなかった。北京師範大学体育系のカリキュラムには，単位制と選科制の実施も見られた。

２．北京師範大学体育系のカリキュラム

1922年の新学制の公布に伴い，北京師範大学のカリキュラムも再編成された。高等師範学校体育専修科のカリキュラム（表４）と比較すると，体育教学法及び実習などの教育内容から，北京師範大学体育系では教科の専門性の強化に力を入れていたことが明らかである。1922年以後のカリキュラムは表５の通りである。

表５からみれば，体育学，教育学科目はさらに増えている。このように，専門教育の強化だけではなく，共通必修科目に，教養教育として社会学，近代教育思想，現代文化，公民などがあり，大学教育として整備されていた。東南大学の場合もほぼ同じである。

表４．1920年北京高等師範学校体育専修科課程表

学年／科目	一	二	三	教　員
倫理	2		2	焦榮
教育心理	心理３	教育３	教育３	韓定生
応用解剖学	3	4	4	費特
体育史	2			費特
生理学		2	2	費特
国文	2	2	2	梅貽瑞
国語		1	1	王璞
英文	5	5	5	袁敦礼
軍事学		1	1	彭福生
楽歌	1	1	1	馮孝思
兵式体操	3			劉鍾芳
兵式訓練		2	2	彭福生
陸上運動	2	2	2	費特
舞踏	1	1	1	費特
競技遊戯	1	1	1	費特
拳術	4	4	4	紀德　周峻山
体操術	3	3	3	費特
合計	32	32	32	

出典：『教育公報』1920年７月，19頁より

表５．北京師範大学体育系カリキュラム（1929年）

学年	課　　程
一	社会科学概論、自然科学概論、衛生、教育概論、体育史、応用解剖学、体育技術
二	哲学概論、教育心理、体育原理、生物學、体育技術
三	教育統計及び測験、普通教学法、参観、体育測験、健康検査、矯正体操、体育技術
四	党義、中等教育、教育行政、児童及び青年心理、師範教育、実習、体育教学法、救急及び按摩術、体育技術
共通必修科	健康教育、疾病学、衛生学、生理学、普通生物学、社会学、音楽通論、ピアノ、武術、童子軍、国術研究、舞踏、水泳、人体機動学、運動生理、文化と教育、小学教育、近代教育思想、現代文化、小学体育、民衆体育、英文文選、中国散文、翻訳、公民、ドイツ語、日本語など

出典：何啓君，胡暁風主編『中国近代体育史』北京体育学院出版社，1989年５月，228頁より。(注：次の戊辰学制時期になっても1931年まではカリキュラムが変化しなかったので史料の都合上1929年のものを使った。以下表６と表７も同じ)

３．北京師範大学体育系教員と卒業生

東南大学の留日学生がいなかった体育科教員陣に対し，1922年における北京師範大学の教員陣容は，留日留米帰国学生とアメリカ人教師を主体として構成されている[24]。1917年，北京高師体育専修科が創設された時に専修科主任を担当したのは，日本の東京高等師範学校博物科を卒業し，武昌高等師範学校主任教授も経験した焦榮（1888－不明）であった。焦榮は北京師範大学を辞任した後，国立北京大学および女子師範大学講師，上海交通大学訓育長，国立北京師範学校校長，北京師範学院秘書長兼体育音楽科主任教授，京師学務局長，東亜文化協議会評議員，中華教育総会委員に任ぜられている[25]。

高師時代の体育専修科教員には，アメリカ人医学博士のソビカがいた。ソビカの通訳者であった袁敦礼は焦榮の後継者として1919年に専修科主任になり，1923年から1927年までアメリカに留学した。シカゴ大学の生理学修士課程を修了した彼は，コロンビア大学師範学院で体育を専攻した。1927年に帰国した後，彼は体育科主任に再任され，1939年まで務めた。1946年６月から1949年までの間，北京師範大学校長であった[26]。

北京師範大学体育系の卒業生（表６）を見てみよう。1926年に卒業した８人の就職先は４年制中学校５人，初級中学校２人，大学１人である。卒業生の出身地は山東と遼寧が２人で，他の河北・湖南・河南・江西は省ごとに１人であった。卒業後の勤務地は北京（３人）・河南（１人）・江西（１人）・山東（２人）・湖南

(1人)であった。1928年に卒業した学生の場合は以下の通りで，師範学校に勤務したものが多く見られた[27]。

姓　名	出身	勤務地
王謙祥	河北	北平弘達中学校体育教員
尚樹梅	山東	山東省民衆体育場場長
葦向和	河南	(不明)
高維燕	山東	山東省民衆体育場指導員
孫雲藻	山東	本校体育系講師兼助教
張世顕	河北	北平市立師範学校体育主任
張寶山	山東	山東省立第一師範学校体育主任
黄迪吉	浙江	山西医学専科体育主任
劉士俊	河北	河北省立第一師範体育主任

以上から，東南大学と北京師範大学の本科体育系は，いずれも中等体育教員を養成したと言ってよい。北京師範大学の方が教員養成を主目的としていたため，教科の専門性が高かったと言えるであろう。一方，東南大学の方は体育研究者と行政人員の養成のなかで体育教員を養成した。

表6．両校の体育系と体育専修科卒業生数

卒業年代	東南大学		北京師範大学
	体育系	体育専修科	体育系
1917		32	
1918			
1919			32
1920		19	
1921			
1922			21
1923	1	9	
1924	3	6	
1925	6	12	
1926	2	7	8
1927	3	12	
合計	15	97	61

出典：秘書処卒業生事務股編印『国立北平師範大学卒業同学録』1934年，127頁，325頁。「国立北平師範学院体育系歴届卒業生同学録（37年3月）」(北京師範大学図書館所蔵)。中央体育研究会『体育雑誌』第一期，南京大陸印書館，1929年6月，112頁により筆者作成。

Ⅳ．大学附設専修科における体育教員養成

以上，高級中学校の体育教員養成を取り上げたが，次に，初級中学校の体育教員養成を考察する。初級中学校体育教員養成は大学本科ではなく，附設師範専修科で行なうことになっていた。これについて壬戌学制は次のように規定している[28]。

初級中学校教員不足の補充をするため2年制の師範専修科を設ける。大学教育科あるいは師範大学に附設し，師範学校或いは高級中学校にも附設する。師範学校あるいは高級中学校卒業生を招く。

前の壬子学制時期と比べると，これまでの中等教員養成の主力であった専修科は，初級中学校教員養成のみの担当となった。教授対象は13－17才までの生徒から12－15才まで，専修科学生入学年齢は17才から18才に変わった。しかし，2年制の修業年限と附設の形は変わらなかった。東南大学に体育専修科が設けられた状況が，次の『体育雑誌』記事に見られる[29]。

乙　体育専修科

一　この専修科の学生は体育科を主科として，衛生科を副科とする，あるいは衛生科を主科として，体育科を副科とするべきである。

二　この専修科の修業年限は3年間とし，修了後本学より証書を発行する。

三　この専修科の学生は転科することができない（ただし，入学試験時の体育系入学者を除く)。また，本専修科の学生は大学試験合格後，体育系への転入ができる。他の系に転入すれば，専修科の単位が認められない。

表7．1929年国立東南大学体育専修科課程表

	第一学期			第二学期		
	科　目	時間	単位	科　目	時間	単位
第一学年	英文	4	3	英文	4	3
	解剖学	4+4	4	人体機動學	5+2	3
	個人衛生	4	3	解剖学	2+2	2
	生物学	3+2	4	急救術	2	1
	術科	1+10	4	術科	1+10	4
				個人体操理論(女)	4	3
	合　計	32	18	合　計	32	16
第二学年	英文	4	3	英文	4	3
	公共衛生	3	2	運動生理	3+1	3
	生理学	3+2	3	社会学	3	3
	人体測量与選体育史隔年輪流	2	1	学校衛生与衛生教育	4	3
	教育心理	4	3	術科	1+10	4
	術科	1+10	4	遊戯教育（女）		
	合　計	29	16	合　計	27	16
第三学年	教育通論	3	3	体育管理と行政	3	2
	選体育史と人体測量隔年輪流	3	2	統計学	3	3
	童子軍	3	2	体育建築及び設備	2+1	2
	診断學	4	3	術科	1+6	3
	体育原理と課程編成	3	2	童子軍	3	2
	術科	1+6	3	女子舞踏編制		
	体育教学法	4	2	医療体操及按摩術		
	学典	2	1	研究報告	3	2
	合　計	29	18	合　計	22	14

注：術科は体育技術のことである
出典：『体育雑誌』第一期，1929年6月，113-114頁。

四　本専修科は男性と女性を入学させる。

五　以下の体育専修科科目を必修科目と見なすほか，実習授業の40時間を加える。20時間ごとが一単位であり，もし研究或いは調査があれば，その成績は体育系主任の認可をもらえば，適当な単位を与える。96単位を取った者は卒業ができる。

六　この専修科の学生は体育系の科目および音楽，英文以外，他科目の選修はできない。ただし，体育系の学生で体育専修科への転入者を除く。

七　専修科の科目（表７）

東南大学の体育専修科は南京高等師範学校の体育専修科と比べ，以下の特徴が見られた。

①女生の入学が実施された。すなわち，東南大学の中等女子体育教員の養成は体育専修科が担うようになった。

②主科と副科の制度と単位制が採用されたため，高等師範学校時代より学習内容の選択自由度が拡大された。

東南大学体育専修科は1923年から1927年までの５年間連続して卒業生を送った。この５年間の専修科卒業生は46人であった。彼らの就職先は，小学校１人，初級中学校24人，高級中学校２人，大学７人，専門学校２人，本科に進学した６人，広東広州第26師特務営政治弁公庁１人，南京中央党部2人であった。高級中学校が普及していなかった1920年代の中等体育教員養成の主力となったのは体育専修科であったことがわかった。

壬戌学制は２年制の専修科を規定していた。しかし，東南大学はレベルを下げずに３年制を維持していた。そのためか，専修科生が卒業した後，学位を巡る問題が出てきた。これについて，福建教育庁が教育部に問い合わせた文書がある。「教育局規程第三条第一項を調べ，大学教育科，師範大学或いは高等師範学校専修科の卒業者，例えば南京高等師範学校専修科卒業者に対し，前項資格を持つ認可ができるかとか・・・」と述べている[30]。ここに見られる「前項資格」というのは本科をさすものである。これに対する教育部の返事は，「（前略）高等師範学校卒業者は本科を指す者であり，専修科は含まない。但し，専修科の入学資格及び修業年限が，本科と完全に一致すれば，本科として認可できる」というものであった[31]。

修業年限の短い専修科には学位がなかったが，本科生であれば，学位取得が可能であるということである。体育学士も可能となった。このようにして壬戌学制時期の中等体育教員養成は大学教育として展開したのであった。

おわりに

壬戌学制時期の中等体育教員養成について，東南大学と北京師範大学を中心として考察した。この考察から，以下のような結論を導くことができる。

①高級中学校体育教員養成は，高等師範学校の昇格運動により生まれた独立師範大学と一般大学教育科の二種類の機関で行われた。これまでの専修科ではなく本科で行われたことがその特徴である。しかし，開始されたばかりで十分な数の教員を養成することはなかった。

②大学に附設された体育専修科は，初級中学校体育教員を養成した。やはり専修科が中等教員養成の主力であったことは前の時代と変わらなかった。

③東南大学は教員養成を主目的とせず，そのため教育実習がなかったが，教員養成を含む広い目的のもと，体育人員を送り出した。一方，北京師範大学は教員養成を主目的とするが，カリキュラムは教育実習を除き，東南大学と大差がない。中国師範教育衰落期と言われる壬戌学制時期であったが，東南大学における中等体育教員の養成はカリキュラムが整備され，この後につづく本格的な大学における体育教員養成の開始となった。

④本科体育系の開設によって，これまでの中等体育教員に対する学位のない時代が終わった。やっと他教科と肩を並べられるようになったのである。

【注】

1）何啓君，胡暁風主編『中国近代体育史』北京体育学院出版社，1989年５月，216頁。

2）多賀秋五郎『近代中国教育史資料・清末篇』日本学術振興会，1972年，414頁。

3）前掲『中国近代体育史』123頁。

4）直隷学務処「直隷提学司附設音楽体操伝習所章程」『教育雑誌』直隷学務処，第十八期，1908年。

5）中国第二歴史档案館篇『中華民国史档案匯篇』第三巻・教育，江蘇古籍出版社，1991年６月，143頁。

6）陳奎生「南京高等師範的体育状況」『体育研究』第一期，商務印書館，1922年，１頁。

7）「北平師範大学」『中国教育年鑑』（第一次・第二冊）宗青図書公司，47頁。

8）「教育部関於国立高等師範学校均設体育専修科与体育講習会訓令・一九一九年四月十四日」『中華民国史档案匯編』第三輯・教育，江蘇古籍出版社，1991年６月，853頁。

9）「令高等師範学校」多賀秋五郎『近代中国教育史

資料・民国篇上』日本学術振興会，1972年，370頁。
10) 同上
11) 霍益萍『近代中国的高等教育』華東師範大学出版社，1999年11月，159頁。
12) 同上，160頁。
13) 劉問岫編『中国師範教育簡史』人民教育出版社，1984年，55頁。
14)「教育部訓令第一一二号・令国立東南大学」教育部編審処編纂股『教育公報』（第八年・第八期）命令，1921年8月，21頁。
15)『東南大学教育科一覧』東南大学，1924年，1頁。
16) 高覚敷「中等学校師資訓練問題」『革命文献第55輯・抗戦前教育概況與検討』国民党党史委員会，1976年。
17) 姜琦「中国師範教育制度之過去現在興将来」『革命文献第55輯・抗戦前教育概況與検討』同上。
18)『東南大学教育科一覧』東南大学，1924年，16頁。
19) 霍益萍前掲書，148頁。
20) 北京師範大学校史編写組『北京師範大学校史（1902-1982)』北京師範大学出版社，1982年6月，73頁。
21)「北京師範大学体育系変遷」『文史資料選編』（第十五輯）北京出版社，80頁。
22)「(指令第1606号・民国13年8月）令北京師範大学・呈一件組織大綱由」『教育公報』（第11年9期），18-19頁。
23) 前掲『中国教育年鑑』，47頁。
24) 前掲『教育公報』（第八年・第七期）報告，19頁。
25) 橋川時雄編『中国文化界人物総鑑』名著普及会，昭和57年3月，583頁。
26) 前掲『北京師範大学校史（1902-1982)』208頁。橋川時雄，前掲書384頁。
27) 秘書処卒業生事務股編印『国立北平師範大学卒業同学録』1934年，127頁。
28)「学校系統改革案」多賀秋五郎『近代中国教育史資料・民国篇上』日本学術振興会，1972年，325頁。
29) 中央体育研究会『体育雑誌』第一期，南京大陸印書館，1929年6月，112頁。
30) 前掲『教育公報』（第十一年・第五期），48頁。
31) 同上

（主任指導教官　佐藤尚子）